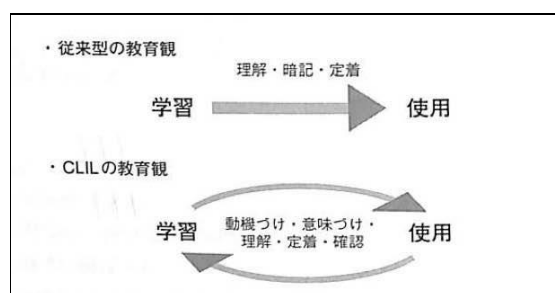


第3章
CLIL(内容言語統合型学習)の目指す英語教育
P72-88

1. 統合型の CLIL アプローチ

CLILとは、**Content and Language Integrated Learning (内容言語統合型学習)**の総称である。発祥はヨーロッパであり、近年は上智大学のCLILプロジェクトを皮切りに、日本でも少しずつ広がりを見せている。

このアプローチは、従来の「学ぶことを何よりも最優先とし、その後に使う」という“**Learn now, and use later**”の考え方とは、大きく異なっている。まず、従来の教育アプローチは、言語形式を場面や状況から切り離して考える「分離型」及び「分解型」アプローチであった。これに対し、CLILは言語教育と他教科の内容教育と統合した形で行う。言葉を、内容伝達の重要な媒体として捉え、言語を用いつつ内容を広く深く理解していくことを大切にしている。Mehisto, Marsh, & Frigols(2008)では、CLILのこのようなアプローチを“**Learn as you use, use as you learn**”と表している。



CLILは、学習(learning)と使用(using)を相互補完的で相乗効果の期待できる関係であると考えている。

また、スピーキング・ライティングといった産出技能だけではなく、リーディングやリスニングと言った受容的な言語活動にも用いられる。(例：リスニングで聞き取った事を個人でまとめ、その後にディスカッションとレポートをする) 目指すのは4技能を使いこなす能力の育成である。

2. CLILの4つのC (CLILの特徴について)

CLILを特徴づけるものとして、「4つのC」が挙げられる。CLILでは、以下の「4つのC」を統合した形で言語教育の質を最大限に高めようとする。

- ①Content … 科目や内容
- ②Communication … 語彙・文法・発音などの言語智識や、4技能
- ③Cognition … 様々なレベルの思考力
- ④Community / Culture … 共同学習、異文化理解

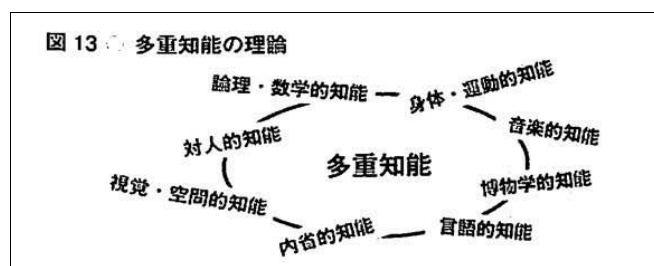
※この4つのCは、それぞれ支え合って存在していると考えられている。

また、CLIL では出来るだけ実生活で使用されているオーセンティックな素材（新聞、雑誌、ウェブサイトなど）を活用する事を教師に奨励している。また、様々なレベルの思考力を刺激する狙いがあるため、文字だけではなく写真や絵、数字と言った多角的な角度からの情報活用も求められる。

3. CLIL のさまざまな利点

①多重知能（multiple intelligences）と記憶メカニズムへの働きかけ

近年の研究では、「人間の知能は様々な能力の集合体である」という考え方の多重知能の理論（MI 理論）が普及してきている。多重知能の理論によれば、人間の知能は少なくとも8つのカテゴリに分けられ、人により強いもの・弱いものが異なると考えられている。また、知能同士は単独ではなく複合的に働き、補い合い、人は様々な力を引き出していけると考えられている。



従来の英語教育では、言語知能を重視してきた。その中でも文法分析力や暗記力というより狭い知能が極端に強調され、そういったものが苦手な生徒は劣等性としてのレッテルを貼られてしまい、結果的に英語が嫌いというネガティブな感情を抱いてしまう。しかしそういった生徒が嫌い・苦手な英語は、英語の全てではない。機械的な文法学習と単語の暗記作業ではなく、英語を本来の意味での「言葉」として、また「コミュニケーションの手段」として使う事がこれからの英語教育に求められる。

CLIL では、英語を生きたものとして捉え、言葉と内容教育の両方に焦点を当てるので、言語能力が高くない生徒であっても、内容に興味や強みがあれば、CLIL のクラスで十分にやっていける。

また、CLIL の持つ「生徒の多角的な知能に訴えかける」という点は、人の記憶メカニズムの点でも理にかなっているといえる。学びと定着は、外からの新情報と学習者が保有する旧情報を密接に結び付ける結果として起こるので、ただ繰り返すだけの学習は動機づけの面からだけでなく、認知的な面から見ても不自然で難しい事とされる。

②オーセンティシティーとモチベーション

CLIL の別の利点としてオーセンティシティーを最大限に利用することが挙げられる。先述したように、CLIL では新聞や雑誌などを積極的に使うので、日常生活から無理なく素材を発掘することができ、その素材の活用方法も意見交換や発展学習など多岐に渡る。対して、従来型の素材は日常の場面からかけ離れていたり、特定の言語形式を取り扱った不自然な素材になりがちである。こういった事は、多かれ少なかれ生

徒のモチベーション面に影響を与えることになるだろう。

間違いを恐れる生徒の言語不安

言語形式ばかりにこだわった授業では、間違いを恐れやすくなる傾向がある。特に教師が言語形式を一から十まで教えているような場合には、言語的な正確さへのこだわりが必要以上に強くなり、間違いへの恐怖が高まってしまう。また、いつも正解が 1 つしかないような環境では、生徒の発話が制限され、意欲も削がれてしまい、「授業中は出来るだけじっと身をひそめよう」「最低限の事だけを発言しよう」という授業態度を促進しかねない。生徒には自由に発言・挑戦出来る機会を与えるべきである。

CLIL の授業でも、こういった言語不安が全くなくなるわけではない。しかし、形式よりも意味に重きを置くため、従来の形式重視の授業に比べると言語不安を和らげることが可能である。

生徒の自律性・教学と自律性の関係

CLIL は生徒の自律性もはぐくむことが出来る。外国語活動における自律性とは、生徒自身が主体性を責任感を持ち活動に取り組む力の事を指す。CLIL では、比較的自由度の高いタスクや、生徒自らが選択したテーマにそったプロジェクト・ワークをふんだんに活用し授業が行われるため、生徒が能動的に活動する事が可能である。

また、CLIL の授業では 4 つの C のうちの一つである Community(協学) の理念に沿ってペア・グループ活動をすることが多い。そういった中で協調性もはぐくまれることになる。一つのタスクに複数人で取り組む過程で、コミュニケーションは必ず生じる。コミュニケーションが生じるということは、生徒同士が意見を交換しているということであり、自律性も刺激される。自律性と協調性は相互補完的な関係である。

教師にとっての利点

CLIL は、生徒の多重知能に訴えかけ、個性を輝かす可能性がある」と述べたが、それは教師に対しても同様である。教師にも、それぞれ得意不得意な分野がある。しかし、従来の英語授業では、教師のそういった隠れた才能が生かされていない。そしてそれは日本人教員だけでなく ALT も同様である。

上智大学の研究チームが実施した ALT 対象のアンケート結果では、多くの ALT が、「授業準備などにもっと関わりたい」「自分の能力が十分に発揮されていない・活用されていない」と感じていることが報告されている。貢献意識の高い ALT と日本人教師のより深い協力体制が求められるだろう。

教師の言語不安の克服

普段あまり注目されることのない問題であるが、英語で授業を行うことに躊躇あるいは緊張してしまう教師は少なくない。今後、英語教育改革を行う上で教師側の不安を軽減していくかを真剣に考える必要がある。

形式偏重のクラスでは、生徒の間違いがそのまま「しっかりと学習していない証拠」につながってしまうので、生徒側の緊張感が増すばかりであるが、それと同様

に教師にの足かかるプレッシャーも大きいものとなる。この完璧主義が、英語で話す事を避けるという行為につながる。

CLIL では、意味に重きを置くので形式に対する注目度は比較的下がることになる。伝えたい内容の重要度が増せば増すほど、文法などの形式に対する完璧主義というのは無意味になる。(例：海外に行ってトラブルに巻き込まれるシーン)

生徒にとって、教師が率先して英語で話す姿がロールモデルになる。生徒の言語不安を解決するためには、まず教師自身が自信の言語不安を克服していく必要があるだろう。

4. CLIL のバリエーション

CLIL には様々なバリエーションがある。



主要目的による分類

Soft CLIL

近年では、Soft CLIL でありながらもグローバル推進教育の影響で濃い内容を扱った授業が増加。「言語教育が主で、中身はその次」という考え方が薄れてきている。

Hard CLIL

日本人にとっては、英語で授業を受けるといった形になる。しかし、教師側は CLIL である以上は言葉の教育と支援を忘れてはならない。視覚教材や体験的学習などを盛り込んでいく必要がある。また、Hard CLIL は必ずしも上級者のみを対象としている訳ではない。

頻度・回数と比率による分類

Heavy CLIL

学期中に CLIL 多数取り入れる場合。トピックベースのカリキュラムを考案し、それを如何に CLIL 化するかを考える必要がある。

Light CLIL

学期中に数回だけ行う場合。手軽に行う事が可能。(例：英語検定の教材を使用)

また、授業時間すべてを使って CLIL をおこなえば、Total CLIL となり、一部なら

Partial CLIL になる。最も効果的なのは Heavy + Total である。

授業内使用言語による分類

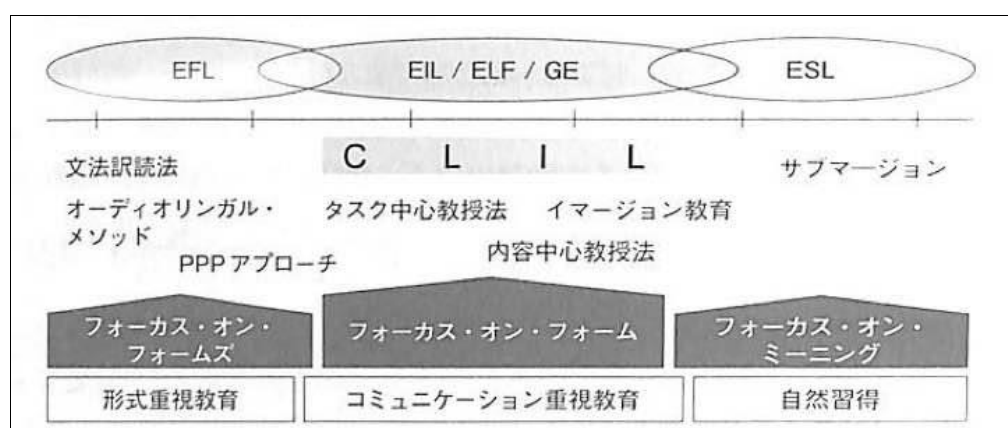
- 目標言語のみ … Monolingual CLIL
- 日本語併用可 … Bilingual CLIL

CLIL 授業を成功させるためには、「分からなければ日本語で」というスタンスではなく、「ここそこは日本語で」という時に日本語を使う方が望ましい。教師にとっては、インプット・アウトプット・インタラクションを最大限にしつつも、母語の利点をどう生かすかということが課題である。なので、まずは英語で分かりやすく説明する努力をすることが CLIL 成功のカギとなるだろう。

5. CLIL とフォーカス・オン・フォームの関係

さまざまな教授法とフォーカス・オン・フォーム、CLIL の関係

以下の図は、さまざまなアプローチやメソッドを相対的に表したものである。



EFL/ESL の二元論を越えて

EFL (外国語としての英語) 対 ESL (第二言語としての英語) という区分けは昔からよくされてきたが、グローバル化が進み、インターネットや海外旅行が普及した現代の社会においては、日本国内に居ながらも英語に触れるチャンスが溢れており、こういった厳密な分類が徐々に意味を失いつつある。

この二つを包括したのが、EIL (English as International Language : 国際語としての英語) や ELF (English as a Lingua Franca : 共通語としての英語)、もしくは GE (Global English : グローバル英語) である。日本国内でも英語を使う機会は少なからず存在し、また非英語圏でも英語を国際語・共通語として使用しなくてはならないことが多い。昨今では、ノンネイティブ同士の交流が、ネイティブ同士の英語の交流よりも盛んになっている。よって、英語はもはや外国語の枠を超えて、世界とつながるために必要な言語として存在していると捉える必要はある。このような考え方を由来とし、従来型の英語教育の範疇を超えた学びの姿が自然と浮かんでくるのではないだろうか。

形式重視～意味重視の教育

PPP アプローチ (Presentation-Practice-Production Approach)

文法訳読法やオーディオリンガルメソッドを使った考え方、もしくはそれにコミュニケーション活動を付け足した教育法。やり方によっては、フォーカス・オン・フォームに近くなる。

フォーカス・オン・ミーニング

意味内容重視で、自然習得を重んじる。

サブマージョン・イマージョン

よく混合されるが、実際は違うもの。サブマージョンは目標言語にどっぷり浸からせ、否応なしにその言語を習得させるというアプローチである。Sink or swim という考え方であり、欠点は「荒削りの英語力」を得てしまいやすいという点である。また、アカデミックライティングやリーディングはそれなりの教育を受けないと身に付きにくく、サブマージョン環境での英語習得は個人の素質や努力による部分が大きい。一方、イマージョン教育は母語話者ではない学習者を対象に、目標言語で教科教育を行うアプローチである。教師は生徒の言語的ニーズに対応して教材を用意したりして内容重視教育を目指す。従来イマージョン教育では教科指導に重きを置きすぎて言語土道が二の次になっていた。現在は、フォーカス・オン・フォームの手法を取り入れて行うようになりつつある。

CLIL とフォーカス・オン・フォーム

これらの教育アプローチに対して、ちょうど中央に位置しているのがタスク中心教授法や CLIL である。

図の中で、CLIL の幅が広がっているのは、CLIL に様々なバリエーションがあるからである。バリエーションの選択次第では、フォーカス・オン・フォームズに近くなったり、フォーカス・オン・ミーニングに近くなったりする。Soft CLIL を重視しすぎれば内容面がおろそかになり、フォーカス・オン・フォームズになる。逆に Hard CLIL を重視しすぎれば言語面がおろそかとなり、フォーカス・オン・ミーニングになる。しかし、CLIL の 4 つの C を元に、内容と言語を統合した教育をおこなえば、フォーカス・オン・フォームのアプローチとほぼ同一のものとして扱う事ができる。

フォーカス・オン・フォームや CLIL といった名称は、由来や地域性、理論的發展背景の違いに由来するものであるが、実践面から考えるとこだわる必要はないが、不必要な混乱を避けるために教育アプローチ全体は CLIL、コンテキストの中で形式重視の活動や指導を指すときはフォーカス・オン・フォームを用いることにしたい。

日本の教育は、CLIL を教育の基本的なアプローチとし、そこから創出される教区環境の中でフォーカス・オン・フォームを実現するべきである。